

# 「己の舞を舞え！」

河内長野市教育委員会

教育長 福田弘行

歌舞伎や、茶道・華道等の世界では、その伝統の中に「守破離」という考え方があり、仏教界に言う「聞思修」や「開示悟入」と同義であろう。

師が学習者に、高く深い世界を示し、これを忠実に「守」らせ、やがて、学習者は師の世界を「破」り、師と「離」れ、別個の世界を創造し、一人旅を始める。教育の世界も、まさに、この「守破離」の思想を根幹に据えて取り組むべきものと言えよう。

本市の教育行政、特に児童・生徒の教育を預かる私が、常に目指しているものは「一人旅」であり、様々な教育課題に対して打ち込み続ける施策も、各学校園が校長の下で「己の舞」を舞い始める準繩と言える。今次教育改革において、「学校の自主性・自律性の確保」が提言されているが、私自身、軌を一にするものと大いに歓迎するところである。

さて、本年度の年頭にあたり、A4一枚に私の願いをまとめ、全教職員に送った。

「教職に携わる者の使命は、子どもたちに対して未来からのメッセージを代弁することであり、過去にこだわることなく、子どもを主人公にした取組を積極果敢に進めてほしい」と。

教育に特効薬はなく、それぞれの立場、職責の上に、様々な観点や切り口での主体的な取組の積み重ねこそが、教育改革の鍵を握るものであり、教育行政も学校と一体となった取組を進めてはじめて、教育効果が期待できるものであるとの思いからである。

新たな教育課題が山積する中、本市には、その課題解消に向けて、教育委員会が教職員と共に研究し推進するためのプロジェクトチームが多くある。総合的な学習の主要テーマとして提示されている「英語教育・国際理解教育」「情報教育」「環境教育」をはじめ、「開かれた学校づくり」「小・中教育課程」「部活動」等々、四割近い市内教職員が、市全体の教育を構築するためのスタッフとして、定期的に会合を持ち、その成果を施策に結びつけている。また、平成十一年度から始めた、夏期休業中二日間にわたる、全教職員対象の

研修「教育フォーラム」も、学校長を中心に多くの教職員が、その中心メンバーとして、教育委員会と連携しながら企画から運営すべにわたって事業を進めている。こうした教職員の姿勢と汗が、各学校園に見られる先進的な取組の原動力となっていると言えよう。

「あなたにとつての宝は？」と問われれば、「私は、迷うことなく「教職員である」と答えるであろう。新しい教育の正否を決する鍵を握るのは、紛れもなく教職員なのである。」

先頃、教職員の資質向上が喫緊の教育課題として浮上しているが、あらゆる教育課題の本源は、内部にある意識と言える。その意識を高め、資質を伸ばす近道は、教職員を地域の風面に直にさらすこと、そして、学校の運営、さらには、市教委の施策にも主体的に関わらせることである。まさに、飛耳長目によるボトムアップの処方箋と言える。

本市の教育は、今、こうした取組の上に立ちながら、四つの視点で施策を進めている。つまり、「見えざる壁への挑戦」「未来への挑戦」「豊かな心への挑戦」「個への挑戦」である。詳細については、昨年度発刊した『明日への教育、四つの挑戦』に集録してあるが、これまで培われてきた不易な教育活動を維持

しながら、新たな時代を拓く教育を推進するため、その節目として市内二十二校園が同じ土俵に立ち、改革を始められるようにまとめ上げたものである。

具体的な活動の一部を紹介すると、

#### 【見えざる壁への挑戦】

- ・ フリータイム参観
- ・ 学校教育自己診断
- ・ 地域人材活用
- ・ 幼小中連携

#### 【未来への挑戦】

- ・ 情報教育
- ・ 小学校英会話学習
- ・ 環境教育
- ・ 教育改革推進事業

#### 【豊かな心への挑戦】

- ・ ボランティア活動
- ・ 農業体験、自然愛護
- ・ 読書活動推進
- ・ スクールカウンセラー、心の教育相談員

#### 【個への挑戦】

- ・ 職場体験事業
  - ・ 少人数授業
  - ・ 通級教室と養護教育
  - ・ 自己管理能力の指導
- 等々である。

本市は、府内でも三番目に大きな面積を持ち、市の七割が山林という自然豊かな環境にあり、南北朝時代の「建武の中興」で有名な「楠木正成」が活躍した土地でもある。また、高野街道の宿場町であり、現在は、関西国際空港のアクセス道の通過点でもあり、市内には、女人高野と称される天野山金剛寺や観心寺といった文化財が多く点在する市である。自然の美しさは、その土地や場所など、その環境に依りて、そこにふさわしい植物が生き続けるところにある。これと同様に、公教育が、今目指すべきものは、地域に根ざした教育と言える。市教委が示す学校教育の重点課題の一つに「思いやりとぬくもりのある、ふるさととしての学校づくり」を掲げたのもこうした思いからである。

脈々と続く市の伝統・文化の継承者を育成し、子どもたちを、二十一世紀を担うにふさわしい、国民としての基礎的基本的な資質、教養をきつちりと培う教育を実践することが重要である。昭和五十六年度に導入し、現在、各中学校区に一名ずつ配置している外国人英語講師を通じて、異文化と出合しながら、一方では、地域人材を活用して、市内の文化や伝統と触れ合い、日本人としてのアイデンティティを育てる豊かな活動を推進する。ま

た、司書を中心とした読書活動の推進、さらには、遠く諸外国の児童・生徒とインターネットやテレビ電話でのメール交換を通して、コミュニティケーション能力を育てるなど、次代が要請する資質・能力の育成にも目を向けながら、各校園それぞれが殻を破り、地域や保護者の願いを汲み取り、独自の学校文化を創造し始め、己の舞を舞い始めている姿は、実に頼もしいものである。

毎年、一学期から二学期にかけて、各校長に学校づくりのヒヤリングを行い、全学校を訪問して、すべての学級の授業を参観しているが、私自身、人間教育の場である学校、教室の雰囲気や風土を常に肌感じながら、市としての教育を推進していきたいと考えている。学校現場にこそ改革の本質が潜んでいる。と言えよう。

二十世紀後半から学校の役割が徐々に変わり、学校が柔軟な姿勢を持たなければ、多様化する時代のチャネルに対応できなくなっている。こうした中、学校を中心に、各地域で、幼児から大人までが様々な生き方や価値観とふれあい、交流しあえる機会や場所、情報交換、共有し合えるシステムづくりに楽しむ毎日である。

